７月１７日　分科会「コロナ禍から考える子ども・子育て支援」を」受講して

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　村岡正嗣

本分科会は講師の増山先生からの「子どもらしい子とは？」の問いかけから始まりました。子どもは全身エネルギーの塊、べたべた、ねばねば、くっついてくる、絡みついてくる、それが子ども。そうして感情を共有し社会性を学ぶ。しかし、コロナでそれが遮断されている。今の子どもは、「〇〇してはいけない」と言われ続け、「禁止の言葉の海に投げ込まれている」との指摘は鋭い。各地の「子ども白書」も紹介しつつ、コロナ禍で、子どもの政策を決めるには「子どもの参加で決めること」子どもの意見表明権を保証すること。さらに、子どもの権利について、多面的・複眼的把握が必要だとして、６つの権利と６つの育（療育、養育、教育、遊育、甦育、治育）が紹介され、特に「遊育」の大事さを「遊びは子どもの主食です」と言い、同様に「失敗できる権利、やり直し立ち直っていく権利」としての「甦育」の重要性も強調されました。本講座の考え方の軸は「子どもの生の声から出発する」です。これは地方自治に関わる者として、すべての課題に共通すると確信したところです。